

62 歳男性

現病歴：以前胃のもたれを感じたことがあった。最近友人が胃癌と診断された話を聞き、不安になって人間ドックを受けた。その際に行った上部消化管内視鏡検査で胃に病変を指摘され、受診した。

尿検査、血液検査および腹部超音波検査で異常なかった。

既往歴：高血圧。胆石胆嚢炎に対し胆嚢摘出術後（56 歳時）。

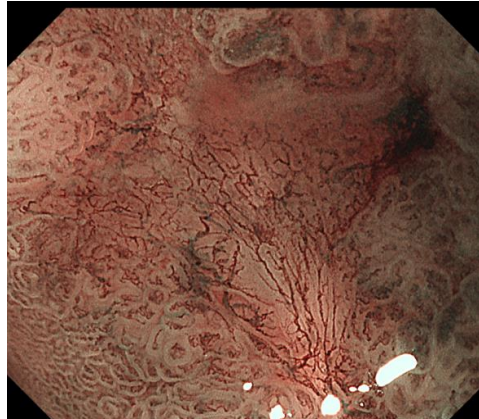
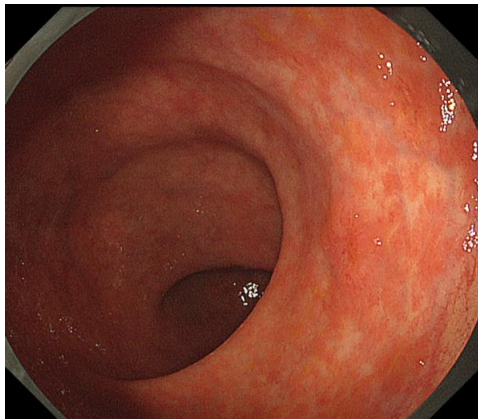
生活歴：喫煙 30 本/日×30 年、現在禁煙。飲酒 日本酒 3 合/日×40 年。

家族歴：特記事項なし

現症：身長 173.4 cm、体重 76.6 kg、体温 36.5 °C、脈拍 77/分・整、血圧 128/76 mmHg、
臍上部に手術痕を認める。腹部平坦軟、圧痛なし、腫瘤を触知しない。

検査所見：赤血球 488 万 / μ L、Hb 15.5 g/dL、Ht 45.5 %、白血球 8110 / μ L、血小板 23 万 / μ L、総蛋白 6.8g/dL、Alb 3.7 g/dL、AST 22 IU/L、ALT 25 IU/L、CRP 0.19 mg/dL、CEA 5.1 ng/mL、CA19-9 25 U/mL

上部消化管内視鏡検査を行った。胃の内視鏡像（通常観察、NBI 拡大観察）を次に示す。



問 1. ピロリ菌感染に関連する所見として誤っているものはどれか。

- a. ABC 検診ペプシノゲン陽性
- b. 鳥肌状粘膜
- c. 黄色腫
- d. 萎縮粘膜
- e. 胃底腺ポリープ

問 2. 上部消化管内視鏡検査で ESD（内視鏡下粘膜剥離術）の絶対適応病変と判断した。病変の所見として誤っているものはどれか。

- a. 大きさは 10mm である。
- b. UL (+) である。

- c. 粘膜下層への浸潤を示唆する所見はない。
- d. 病変は前庭部後壁に存在する。
- e. 分化型癌である。

問 3. 胃癌について正しいものはどれか。

- a. 左鎖骨上窩リンパ節に転移しやすい。
- b. ピロリ菌感染患者が早期胃癌治療と同時にピロリ菌除菌すれば、胃癌再発はなくなる。
- c. 早期胃癌は、深達度が粘膜下層までで、リンパ節転移の見られないものをいう。
- d. 胃癌治療は、遠隔転移がある場合でも可能な限り原発腫瘍を摘出する。
- e. 上部消化管造影所見で **bridging fold** は胃癌を示唆する所見である。

48 歳男性

現病歴：28 歳時、会社の健診で肝機能異常を指摘されたが、症状は特に何もなく、医療機関を受診していなかった。数カ月前から体のむくみ、腹部膨満感を感じていた。昨日、黒色便を認めたが様子を見ていた。本日突然吐血し、救急搬送され、緊急内視鏡の方針とした。

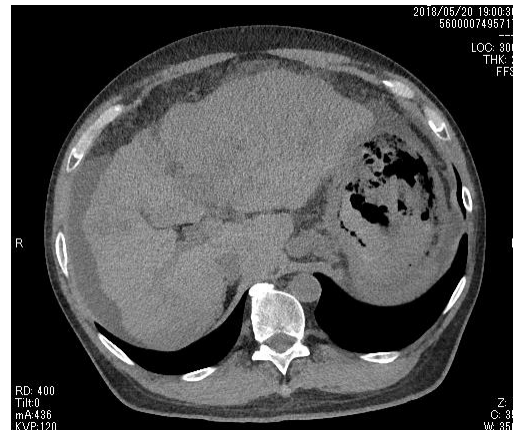
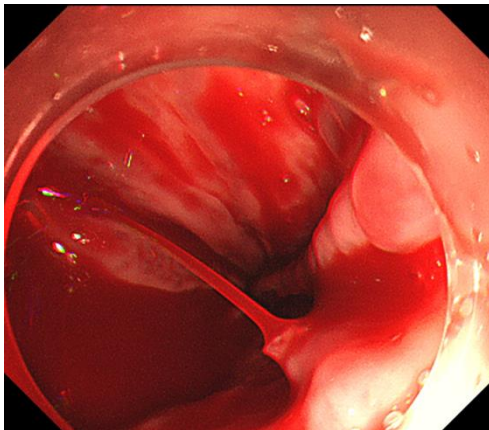
生活歴：日本酒 5 合/日×28 年。

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現症：意識清明。身長 181 cm、体重 102 kg、体温 36.6 °C、脈拍 100/分・整、血圧 81/64 mmHg。眼球結膜に黄疸あり、眼瞼結膜に貧血あり。腹部膨隆、圧痛なし、波動を触れる、肝・脾を触知しない。羽ばたき振戦なし。

検査所見：赤血球 162 万 / μ L、Hb 6.3 g/dL、Ht 18.1 %、白血球 17060 / μ L、血小板 18.2×10^4 / μ L、PT 18 %、Alb 1.6 g/dL、BUN 29 mg/dL、Cre 1.28 mg/dL、総ビリルビン 5.0 mg/dL、AST 132 IU/L、ALT 51 IU/L、ALP 578 IU/L、 γ -GTP 188 IU/L、Na 131 mEq/L、K 5.7 mEq/L、CRP 8.70 mg/dL、HBs 抗原 (-)、HBs 抗体 (-)、HBc 抗体 (-)、HCV 抗体 (-)

上部消化管内視鏡像、CT 画像を次に示す。



問1. この患者に対しての初期対応として間違っているのはどれか。

- a. 輸血
- b. バルーン閉塞下経静脈的静脈瘤閉塞 (BRTO)
- c. 内視鏡的静脈瘤結紮術 (EVL)
- d. 内視鏡的硬化療法 (EIS)
- e. Sengstaken-Blakemore tube による圧迫止血法

問2. 肝性脳症の悪化に影響する因子として誤っているものはどれか。

- a. 循環不全
- b. 脱水

- c. 上部消化管出血
- d. 低蛋白食
- e. 便秘

問3. 食道・胃静脈瘤の治療について正しいものはどれか。

- a. 胃静脈瘤に対するバルーン閉塞下経静脈的静脈瘤閉塞（BRTO）でバルーンを挿入するのは左胃静脈である。
- b. 食道静脈瘤の治療にもバルーン閉塞化経静脈的静脈瘤閉塞（BRTO）は有用である。
- c. 内視鏡的静脈瘤結紮術は硬化療法よりも再発率が低い。
- d. 食道静脈瘤 F2、RC1+は予防的治療の適応である。
- e. 高度黄疸を合併した食道静脈瘤に対しては内視鏡的硬化療法を積極的に行うべきである。

解答

問 1. e

問 2. b

問 3. a

問 4. b, d

問 5. d

問 6. d